
君らしく愛らしく世界は回る

shiori@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君らしく愛らしく世界は回る

【Nコード】

N7010N

【作者名】

shiori@

【あらすじ】

あるとき、君は我に返り世界を見つめ始めた。
きっかけといえるものは何かわからない。
でも君は愛される何かであることを望み、何かを愛そうとした。

君はやがて世界を知り、世界を恨む、しかし最後には世界を愛する。
ろう。

これは、君と君が僕を知るために歩んできた道のり、その断片とな

る言葉の数々。

前文くクローン

<前文>

私を掴んでほしい
私に触ってほしい
私を愛してほしい

動物と言語、時間と距離、アイらしく回る時間、君の声が記憶をめぐる。

私を貶してほしい
私を憎んでほしい
私を傷つけてほしい
私を壊してほしい

私を忘れてほしい

<クローン>

“ 死後硬直 黒い意識のその果てに 哀れなき身の 溺れる時かな ”

たとえば君は日記の中に “ 本当の自分があるよ ” と言った、それが本心で偽りが無いと言った。でも私は残念なくらいにそこに君の心を感じられなかったの。

どうして寂しいと書かなかったの？

どうして愛してほしいと書かなかったの？

そこには君の欲求と言えるものは何もなかったよ？

それが君の本心だと言うの？

本心と言えるものはなんでしょう

私は虚ろ眼で考える

思想、幻想のモノクローム

終わりのなきシナプス上の思考連鎖

でもね、君はそこにリアルでの人の悪口を叩き殴るように書いてるだけだったの

君は感情をぶつけるだけの言葉を思いつきのよう書きなぐっていた。

ただ現実よりも匿名性の高い場所で、君の悪口に頷いてる人がいれば済むだけ、とても君の方が軽傷だった。

君は君自身が傷ついている部分にさえ気づいていないように見えた、私はそれくらい壊れているの、愛されたいと壊れているの。アイシタイと物を投げて怒り狂っているのよ。

診断書〜宝物（前書き）

君と君がまだ出会う前の君と君。そこにあるもの。

診断書と宝物

< 診断書 >

イライラが止まらない、激痛が止まらない、生きている気がしない。軽傷と感じられる感性が何一つなかった。

もはや効果のない騙し騙しの医者薬を飲み、盲目と激痛に呼吸を歪めながら仰向けで眠る。

あまりの信じられないくらい悪臭に鼻が折れそうになりながら目を閉じる、涙が流れた皮膚の場所だけが綺麗だった。寝相を変えることの叶わないまま痛みをこらえながら必死眠った。醜いほどに消えてしまいたい、鏡のない真つ黒の世界で生きるしかない、残された時間を今死んだ方がマシか、まだ生きていた方がマシな生涯か考える、空は真つ直ぐに見れないくらいに眩しいか灰色だった。

…それでも呼吸は荒くなっても、停止することはなかった。

< モニターの中の遊戯 >

「根本的に言つて、君は君自身が可愛いんだよ、だから他の男に目がいくんだ、君は君自身にふさわしいと思う男のもとでしか生きられない欲深い生き物なんだよ」

「何を言ってるのよ！自己中な理屈ばかり並べて、あなたがギャンブルばかりに手を出すから、私が苦勞する羽目になるんでしょ！理屈並べる前に生活を改めなさいよ！！」

「君は明らかに僕よりも多くお金を使っているよ、数少ない娯楽を

奪わないでくれ！君が付き合いだと称して出掛けたかけたお金の方が圧倒的に大きいじゃないか」

「あなたが働くからは君は家を待っていてくれって言ったんじゃないの！でもしないことをカッコつけて言うんじゃないわよ！」

「今だって仕事はしてる、それに満足できないで男を作って遊んでるのは君自身だろ！何も協力できないのに不満ばかり言うんじゃないよ」

テレビのモニターの中では、永遠と夫婦喧嘩の行われている光景が続く

君はそれを理解できないとばかりに冷ややかな目で見ていた

ほとんどの人間関係の失敗はコミュニケーション不足にあると論じた

でもそれはもつと深刻な社会変化を映し出していることに君は気づいていたから

おかしいのは彼らだと簡単に言っただけ

そして君は君自身であるように、一つ一つをゆっくりと愛そうとした

傷ついた心はいつかきつと、癒せるからと信じながら

<宝物>

「天国に一つだけ持っていけるとしたら、何を持っていく？」と君に尋ねたんだ

すると君は部屋中をあさり始めた、君にはどれを持っていくか迷うぐらいたくさんのお宝があったんだ。

そして、何時間した後、君は僕の元に戻ってきた

「何を選んだんだい？」と尋ねた

すると君は連れてきたお母さんを自慢そうに見せて「お母さん！」と元気な声で言った

その自信満々そうな声で気づいた、部屋をどれだけ探しても、やっぱりお母さんに敵うものなんてなかったんだと、一度気づいてしまったら、お母さん以上に大切なものなんて考えられないんだって。

でも、いつか、その一番大切なものは変わってしまうかもしれない君自身はその成長とともに変わっていく、人間らしくあることかもしれないし、相反するものかもしれない、それはきっと、君の愛し方次第なんだよ

大切なものが大切なままありますように

君らしく愛らしく世界は回る

<呪いの食物>（前書き）

完成が見え始めたので再開します。

ここからは短くなりますが一項目ずつ更新していきます。

どうぞお楽しみにしていただければと思います。

<呪いの食物>

<呪いの食物>

動物愛護団体は毎日のように動物の身の安全を案じた。

人間は当たり前のように動物を食料として捕食した、気づけば食物連鎖の最上位に人間はあった。人間の日常は間接的な安全性に支配されている。

殺すことをしている民

殺すことを知っている民

殺すことすら知ろうとしない民

皆、嫌なことを押し付けあつて生きていた

殺すことを嫌がり、殺すことを非難し、殺された生き物に感謝に食物を捕食した

盲目に今あるものを受け入れた

疑ってはならない、どれも等しく愛ではならないのだ

ありのままでない場所

あまりに歪な世界を、見えないものは知らないものとして受け入れた

知ってはならなかった、知ることさえ許されなかった

知っては壊れてしまうから、優しいだけの倫理を愛せと、教えを受けたから

綺麗なだけの世界、繋がっているようで繋がっていない世界

首の繋がれた鶏の群れを、腸を穿られる魚達を、動物達の殺されていく姿を想像し、感謝し今日も生きていく

君らしく愛らしく世界は回る

身の安全とともに、今日も盲目に生きる

<ノーマライゼーション>（前書き）

最近は外の冷え込みが厳しいですね。

そんな時はこたつでゆっくり読書といきたいものです。

感想や質問等ありましたらこちらのサイト、もしくはツイッターなどでも受け付けております。

ではお楽しみください！

<ノーマライゼーション>

<ノーマライゼーション>

誰が望んだのかも知らないまま、移り変わった景色がそこにあった
誰しもが“当たり前”や“普通”に感謝し、どこかで物足りなさ
と申し訳なさを抱いた

それ以前と、それ以後、どうにもならない現実の中で
平等とは何かを考え、それが偽善であることに涙した、不可能であ
ることに涙した

それでも生きていることには変わらなかった

身長80cmのおばあちゃんが毎日のように仕事をしていた、せつ
せと台車を押していた。

車いすの男性がひたすらにキーボードを叩くのに熱中していた

顔面の崩れた男性が毎日のように構内を歩いた

補聴器をつけた人が周りと同じように仕事をした

耳の聞こえない女性が声にならない声を上げ、しぐさを交えて必死
に注文を伝えようとした

目の見えない少女がうさぎを抱きしめた

誰が望んだのかも知らないまま、景色は普通でないもので溢れた
ジクジクと当たり前であったものが傷んだ、そして見えるものを恐
れた

次第に平等といえることを作るために、人が必死になっていること
に気付いた

消えることのない不自由を和らげるために、大きな意志の元、行われた

等しく、目を伏せていたものと出会う

関わることを恐れる気持ちと、愛されない願いと

交差しようとした糸が、だらんと地面の下を張っていた

今もなお変わらない、過ぎた願いと

君の愛する世界が、歪でも幸せなように

< 暗雲の地の雨宿り > (前書き)

あなたがあなた自身を大切に思うこと。
あなたがあなた自身を自衛すること。

< 暗雲の地の雨宿り >

< 暗雲の地の雨宿り >

最初はポツポツと降る、極小の雨粒だった
考えるのは嫌いな方ではなかった　むしろ得意だったのだ
でも、孤独を愛するという意味ではなかった

一瞬だけ、幸せを見たような気がした
でも、それは自分だけが見ていた幻だった
慣れているはずなのに・・・期待してはいけなさと意識していたは
ずなのに・・・

気付けば雨は感じるだけでなく目視できるようになった
目に見えて普段とは異なる苛立ちを感じていた

これ以上考えたくなかった
自分が壊れてしまうのではないかと感じた
どうして、何事もなかったかのように日常を振る舞わなければなら
ないのだろう
ただ後悔したくないだけで、後悔するかも分からないのに“今まで
通りの自分”を演じた

でもそれは、余計に自分を自傷した
メランコリックに沈む内情のさまを言葉少なげに嘆いた
自分は祝福されていないのだと　コンプレックスを簡単に払拭する
ことなど出来ずに
自分はこれからも変わらない生を生きるのだと

自分のあり方を問うのに疲れたように、雨宿りの出来る場所を探した
そんな頃だった 何かが引き寄せられるように変わり始めたのは

雨宿り

真つ暗闇の部屋の中

涙返さず

夜の帷へ

とても静かな室内に声が零れた

こちらに語りかける声ではない 不特定多数に語りかける声

でも、心の沈んだ今、このときにおいて、その声は不思議と暖かかった

冷たく冷えた体が温まっていくように

体の奥底の方からじわりじわりと温もっていく

近寄ってきた猫を抱きしめた

ギュっと、ギュっと強く抱きしめると自然と涙が零れそうになった

自分の今いる場所が少しわかった気がした

部屋の中でパソコンのウィンドウだけが光を放つ中で

静かに横になり 声に導かれるように眠りに落ちた

<匿名性の恐怖>

<匿名性の恐怖>

恨み、嫉み、妬みの類があふれるようにそこかしかに広がっている匿名性が隠している感情を発露させる、まるでそれが自分そのもののような勘違いが蔓延している

発露しているときは息苦しくならない

感情的であることがもつとも内にあるものを発散できた

でも、何も新しく生まれるものはなかった

それに意味を求めることも次第にしなくなる

世界が分かれていくように現実感をなくしていく

そして思うのだ、最初から現実とネットだって分かれているものであったのだと

自分というものが構成され、印象付けられるごとに、本当の自分がいやになるのだ

だからいやで仕方なかった、何もかもいやで仕方なかった

黒い霧が自分を多い、自分を隠していく

時にはまるで創作するように、文字だけで自分を表現し

時には声だけで自分の自我を形作り

時には絵を描き創作性を表現し、他者のイメージの中にある自分にゆだねた

人が嫌いなわけではない

しかし匿名性を持つことは他人の関わり合う中で都合がよかった

ないでもなくあるでもない、必要でもなく必要でもない
人が人を求めることほど不安定であることはないのだ
あるゆるもののしがらみが自分を不安定にさせる

だから晒したくないものだってあるのだ

人が自分の性癖をさらす場であるから、何も晒せない
本当は否定されているのに、否定されることを嫌う

永遠の自己嫌悪、交わらざる魂と魂

だからなの

好きなのに、次第に嫌いになるのは

あなたもそうなのでしょう？

否定したくなるのでしょうか？

あなたは否定してきたのだから

さあ認めなさい あなたの倫理観を持って

その曖昧さを取り払って

そうでなくてはあなたは一生、人を愛することは出来ないのよ

恐怖の中であなたの意識は沈む

今日も生まれる恨み、嫉み、妬み、あなたはどれだけ許せますか？

どれだけ許容できますか？

それだけを救い神のように

救われない世界で

あなたは問い続ける

真っ黒なココロで、真っ白な表情で

<クロスチャネル>（前書き）

意味を求めることは時に困難かもしれない。

だが人の意思とは元来そこまで効率性を求めたものではない。

ラジオであり生配信であり、コンテンツはそれ本人にとって適当であるとは限らない。

しかし、必ず本人にとってコンテンツを行う理由づけがあるのも確かなのだ。

<クロスチャンネル>

<クロスチャンネル>

これだけの匿名性に包まれた会場の中で、仮面舞踏会のような中で一人、話をすることに意味があるのか？

本来、今更自分の存在証明をする必要なんてない

これはクロスチャンネルではないんだ

一人でいることを享受するために付けるんじゃない

ただそれは、理の中で、それが一番自分を表現しやすかったからだけなのだ

色は物質を形作る

心は言葉が形作る

人は人が形作る

ただ人に認められたいだけ、社会に認められたいだけ

人が人を形作る世界だから、人は人をコントロールしたがる

都合のいいことが生きやすい世界であることを知ってしまったているから

声が届くごとに気持ちを高ぶらせ、声は声をつないでいく

その先が自分にとって豊かなものであるようにと願いながら

声は今日も不特定多数の元に届けられる

それがその人にとって大切な一部になることを願って

君らしく愛らしく世界を繋ぐ
その架け橋が、人と人をつなぐ

<器はたる肉体と真実のソドムの境界>（前書き）

新年あけましておめでとうございます。

新年早々不穏なタイトルで申し訳ない。

言葉はその言葉の意味よりも使いどころだと思っ今日この頃・・・。

ごゆるりとしていてくださると幸いです。

< 器はたる肉体と真実のソドムの境界 >

< 器はたる肉体と真実のソドムの境界 >

何のために嘘をつき

何のために真実を語り

何のために信じるのか

繰り返される日常の中で

人と関わる輪廻の中で

傷つき傷つけ、そればかりを考えているような気がした

どうして傷つけていることを理屈で隠さないといけないのか？

そんな理屈ばかりを並べて自己を守り、何が善人なのか？

何が優しい人間なのか？

偽善でしかないことに誰もが気づいているはずなのだ

周りが見えないのは、それは自己の世界の限界なのだ

誰しもがフラストレーションを抱えて生きているのだ

だから同じ事を繰り返す、同じ批判を繰り返す

真に無意味なことを繰り返してきた

視界を広く持ちなさい

勉学に努めなさい

理性的でありなさい

何の信じるべきか

何を信じざるべきか

一つ一つを手探りに
探り探りたる真実を
どうかひとえに幸せを
この身に授けたまえ

<L i b r a r y > (前書)

今は懐かしき出会いの日。

<Light & Rain>

<Light & Rain>

その日 始まりの日 のちに想像もつかないような縁となったその日
どんな人が、集まったのだろうとそれだけを考えていた

絵に描いたような茶番

絵に描いたような安心感

楽しそうに語る、この場に来るきっかけとなった彼女の話が少しだけ
わかったような気がした

それから幾度となく話し合いは続けられた

小さな光は次第に大きくなっていく

音楽は一定のリズムを刻んで、次第に楽しいものに変わっていく

コミュニケーションはイメージを膨らます材料となって

関係性を強固なものへと変えていく

ブログ、ツイッター、スカイプ、テクノロジーは「現在」の「人」
を繋いでいる

理解するのは簡単 難しいのはその享受

わからないとすればそれは話を聞かない愚者と同じ

耳を澄まして聞いてみよ

そこに心を感じられるなら

等しく想い馳せられることでしょう

いろいろなことが起きて

それはすべて人が引き起こしたことで
そこには人の意志と息吹があつて
だから、落ち着いてそこにいられるのです

好きになつてしまったのは、いわばそういう心の在処を見つけてしまつたから

光と雨が織りなす劇場はやがて小さなコミュニティようになって
理解者への想いへと変わっていく

理解者の優しさはゆつくりと傷跡をなぞり、傷を癒していく

言葉は心を繋ぎ

@は解を作り出す

解と解が交わり、解は内なるものから外なるものへと変わっていく

そのときに初めて意味を成す思想

そのときにはじめて生まれる感情

ああ、どんどんとバカになつていく

素直になれるその日まで、どんどんとバカになつていく

心地よくも回る世界

君らしく愛らしく世界は回る

＜ “空飛ぶうさぎ” の回答＞（前書き）

一度目の出会い、そして言葉で交わしあった愛のある日々の始まり。
それから深まりゆく感情。

いつしか求め始める二度目の出会い、真実の真理を求めて
言葉を交わすことに一番近い場所での人と人との繋がりに思いを馳
せる。

支えとなる、最も信じられる君へと向かって

< “空飛ぶうさぎ” の回答 >

< “空飛ぶうさぎ” の回答 >

君の声を聴かせてくれないか？

君のぬくもりを感じてさせてくれないか？

君を信じさせてくれないか？

それですべて満たされること

幼き頃のメロディーが意味を成すこと

さあ

月の社から降りてはくれまいか？

一番近くで感じたいのだ

それが人と人との繋がりであるから

あなたは見えないことの不安をどう精神的に処理しますか？

見えないことはとても不安なことです。それがわかる日があなにもきつと来ます。

そう、まだ幼い頃、少女は歌の中で“うさぎは空を飛ぶんだよ”と言いました。

少女は生まれてこの方、目が見えないのです。それでも少女は、本当は目に見える世界を望みながら、見える世界をイメージしつづけ、

生き続けました。

少女はその手で必死にうさぎの身体に触れます。
そうして必死に知ろうとするのです。

見えるからこそ感じられることのすべて
その大切さに気付いたなら

さあ

月の社から降りてはくれまいか？

そこでもう一度会おう

心と心で触れ合ってきたものの
生身の人間同士の出会いとして

そして、もっと鮮やかに刻み始める
君らしく愛らしく回る世界

＜ “空飛ぶうさぎ” の回答＞（後書き）

前書きがカットしたワンシーンの短縮版になってます。

空飛ぶうさぎというのは僕にとっての割と幼い頃の歌の思い出です。

ここではそれを今必要な形としてつかっています。

ところどころ話のつながりを持たせながらも

単一でも楽しめるものであればいいかなと思います。

それではまた次回の更新をお待ちください。

＜すべての魔法が消えた街へ＞（前書き）

某所で書いたものをちよつと書き直して投稿。

<すべての魔法が消えた街へ>

<すべての魔法が消えた街へ>

「すべては過去になる」

時間経過という不変の摂理は如何様にも操作できない。それは未来という未知数のものでさえ、人間の意識の恒久性を待たずして気付けば過去になってしまっているからである。思えば最近はそんなことばかりだった。

人間は未来を思うときよりも過去を思うときの方が死を意識する。あらゆる過去に対して経過する時間によって記憶はリアリティーを失っていき、いずれ忘れ去ってしまう。過去の新鮮さも現在に浸食されてノスタルジーの海の中に沈んでしまう。そうして人間はあらゆるものを失っていくし、それはひどくタナトスへと向かい、死を意識させるものである。

幸福は幸福を繋いだり、不幸は不幸を繋いだりする。

人間は現在をもっとも意識する生き物だからこそ、人間というのは不安定な生き物なのだ。それは極めて人間らしさの溢れたものなのかも知れない、でもそれは逆に考えればとても寂しいものであると思う。それは最近になってどんどん膨らんでいく。あるゆる経験は過去になり、いずれノスタルジーに変わっていくからだ。しかしそれも大人であるからこそ仕方のないことであるともいえる。

社会の作りだしたプライバシーと必然的距離が作りだしたフィルターは人間に二度の出会いを作りだした。それはまだ人間として未知の部分であり未開拓の部分であるのかもしれない、でもそれを人間はほとんどと許容している、彼自身もそうだ。

それが人間の進化なのか順応なのかはわからない。

でも確かに出会ったときから人間と人間の関係だった。

それは今もこれからも変わらない、たとえ二度目の出会いを経たとしても。

言葉にならないものの焦燥感の中で僕はすべてのフィルターを外し、本来の人間と人間の生身の関係に戻るためにいく。その重要性は非言語コミュニケーションの中に内包されていくことだろう。

一年と少しぶりの東京の街へ。

約1年前とは目的も意識も変えて、彼は向かっていく。

＜すべての魔法が消えた街へ＞ （後書き）

次回いよいよ最終話！というか本番です。お楽しみにw

< glow > (前書き)

気づけば前回の更新から半月が過ぎていましたw
日が経つのは本当に早いですね・・・。

いよいよこの物語の本編となる詩です。

これを見るあなたにとって空の色がどんな風に見えているのか
そんなことをふと考えてしまいます。

あなたにとって、広い大気の空が穏やかなものでありますように、
見えるから感じられることの幸せを噛み締められますようにと、一
つ願いを込めてお送りさせていただきます。

それではごゆりと、またあとがきにて。

< glow >

< glow >

愛に定石なんてないのよ

あなたが感じ、信じ、守ろうとしたもの、それがあなたの愛の形なのよ

この広い世界で

確かに何かを共有していること
感じ取れること

触れた瞬間に

全部わかってしまったの

これが繋がっていることのぬくもりなんだって

嘘が嫌いです、嘘をつかせようとする子も嫌いです
嘘をつかせようとする社会も嫌いです

あなたのすべてを受け入れたいのです
その痛みを共有していききたいんです

ただ、それを伝えたくて
体は疼き、言葉が溢れてくるの

信じるの、精一杯に
現実負けそうになっても
絶対に

だってそれが愛を守ることになるから
だから強くなつていくのよ
それが一番の幸せへの近道なのよ

その時、空を見上げて、空ってこんな風に動いたっけ？って不思議
と我に還る

それは自然なことのようにで自然なことではなくて、言語では言い尽
くせない安心感が空の色や、空の見え方さえも変えているかのよう
に思えた。

分厚くもただっ広い雲は、雲間に夕日を昇らせ、ゆっくりと大気の
中を漂っている

それだけの事なのに、ずっと見上げていると安心できた

その雲の先をずっと見ていたいと思った

一体どこに向かっていくのか、その先に何があるのか

もう少しばかり残された、時の中で、ただ漂う雲のようにゆっくり
と。

そういえば、一つ、思い出したことがあった。

よく聞いた話、空がどう見えるかはその人の心理状態によって変わ
るって。

今このとき見える空が、とても穏やかで、澄み切って見えること。

それはこの空が、これからもあり続けるという、約束の証のように思えた。

青空から glow の空へ、そして glow の空に染まった夕日の後ろ側に薄暗い夜空と、満月の月がひよこつと覗き始めた。

段々と暗くなる空の下で、ギュツと手をつなぐ二つの影がいくつも点々とし、屋台やビル、道路に公園などの照明の中でいくつもその時を待つ。

やがて世界が静止するように足音も無数に騒ぐ声も途切れる。

皆が一様に空を見上げていた。大きな木のその向こう側。

ヒュン！という何かが噴射される音ともに、次の瞬間、空が七色に輝き、バーン！！と暴音を轟かせた。

夏の訪れを意識させるようなその光は、次々と打ち上げられ、空を輝きに染めた。

煌めく光が夜空を包むと、何か大きな生の力を得たように

今、この瞬間を共有にしている価値をかみしめるように、ギュツと重なる手に力が入った。

徒然なる時過ぎゆけば

君への想い募りゆく

真実を見る眼から

君をも映す夕暮れの空

価値あることの生なれば

君なしでは在りはせず

永遠なる空を仰ぎ見る

やがて来たりし別れをもう

忘れるほどの

明日も思わぬ幸福の時かな

いつしか気づいてしまったこと。

大人になることは、どんどんと弱くなっていくことだって。

そのことを深刻に考えてしまうこと、変わり果てていく自分を思うこと、いずれ死んでいく自分の生涯を思うこと、それはとても危険で怖いことだって。

押しつぶされそうなほどの記憶と境遇と人間関係の中で大人はやみくもに生きる、これまで続けてきた連続性のそのまた先へ、ひたすらに、やみくもに、無意識になること、考えないようにすることを覚えていく。

自分が傷つかないように、歩けなくならないように、迷惑にならないように。

でも、本当に欲しているのは人のぬくもりだった

ただ死の恐怖に怯えないでいられる、生にあふれた人のぬくもり
生き急ぐことのない安心感。ゆっくりと傷痕を癒していく時間
それだけで十分で仕方がないのだ

それ以前と以後の定理、安心感の中で確実に傷痕が癒えていくのを感じた。それ以後へと確実に変わり果てていく自分自身。その存在の重さを噛み締めるように、長い一日が同じときの中で過ぎていく。君と愛らしく回る時間をいつまでも、そう、いつまでも思いながら。

< glow > (後書き)

なぜ人は人と群れたがるのか、なぜ人と人は結ばれるのか。
なぜそれを求めてやまないのか。

ロストエンファウンドの歌の中でそんなことを考えたことがありました。

知ってしまった幸福はそれ以前となり如何様にも意味を変えていきます

でも幸福というものを、幸福として、紛れようもなく、色あせないように残したいと願うのは、人であればこそなのかもしれません。

この詩が物語の本編であり、区切りであること、そして最初に企画した時にここまで書いてみようという構想は無事達成されました。

僕がボーカロイドの楽曲が好きなことから、keenno様のglowを聞きながら、この詩は生まれました。本当に素晴らしい曲で、ぜひこの詩を見ながら聞いてくれたらなあと思っています。

さてさて・・・、ここで無事完結しようと思ったのですが、残り二つほど続きます、内容としては繋がりの持ちようは少しこれまでとは異なりますが、見る勇気があれば、見ていただければと思います。

<メルトダウン>

<メルトダウン>

およそ死を恐れることが

長い人生の中で増して自己の心理内部を支配することなど

そうそうのことでもなければいけないのかもしれない

君にとって大切なこと

そのピースを一つ一つ伝えていくことは簡単なことなのかもしれない

でも、その先にあるもの、ずっと先にあるものを

伝えていくことはそう簡単なことじゃない

それ以前とそれ以後

君の経験指数

君の臨界地点

君の許したる幸福地点

幸福を求めるか、痛みからひたすら逃れて生きるか

君にとって大切なことを思うとき

僕は幸福を伝えるだろう

そして君に、もう一度確かめることだろう

幸せを知るから死が恐怖として認識されることを

君にとって大切なこと

もう自傷しないために

君が君を傷つけないために

君が君を失わないために

伝えられる、君にとって大切なこと

<メルトダウン>（後書き）

次が最後となります。

随分長い連載になってしまっていますが、どうぞ最後までお楽しみ
いただけたら光栄です。。

ではおやすみなさい。

< 自傷する社会の肖像 > (前書き)

長く続いた連載もこれにて終幕となります。

最後はだいぶ趣も変わった話になりますが、これまでの話のプラスアルファとして認識していただけると幸いです。

<自傷する社会の肖像>

<自傷する社会の肖像>

この一連の詩の<私>という一人称が社会であること、それは君たちという人間に向かって語りかける、社会の意味であることを改めて今、伝えたいと思う。

心理学の分野で、人間には生へと向かう本能“エロス”と死へと向かう“タナトス”がある。エロスは自己に欠けているものを得ようとする自己実現的な愛である。一方タナトスは自らを苦悩の中に置き、攻撃的なものへと変容させていく意思である。人間はこの二つの本能を振り子のように作用させながら生きている。

しかし一方で生を実感すればこそ死の恐怖に怯え苦しみもするし、死を意識すればするほど本来の生の大切さも実感できる。いわば人間の幸福とは対象的なものでしかない。

人間は自己を第三者的に置き換えて、対象的に捉えることで幸福であるかを分析する。

これはきわめて危険な思想である。

はたして人間に正確な自己の幸福など分析できるのか、それは自己を責める材料にしかないのではないか、宗教の曖昧化された社会ではそれは顕著に表れるものであることに人間はなかなか気づけない。

人間は自分にとって都合のいい幸福しか求めない。

そしてそれは満足してしまえば、また違った方向性にシフトしていく。

それ以前とそれ以後の定理、もうそれ以前のことなど忘れ、エロス

を確実に加速していく。

そして気づかされる自己の限界、幸福の限界、人間は過去に戻ることはできない。徐々に失っていく日々の弾力性。それは歳を重ねることに得られないことでタナトスを肥大化させていく。

君はやがて自己が許せなくなり自傷するだろう。

今日もこの世界では膨大な数の人が自らを自傷する。

君がこれ以上傷つかないために、僕が伝えていくこと。

魂の幸福地点。宗教でもスピリチュアルでもない幸福の伝え方。

人は簡単に傷つき苦しみ恨む、そのことは人間自身が一番わかっていること

不安に暮れないように

ゆっくりゆつくりと、生きる生き方を

人と人とが支えあう社会を

君らしく愛らしく世界は回る

< 自傷する社会の肖像 > (後書き)

長い間お付き合いいただきありがとうございます。

文章の量としては僕の小説の中では少ない方ですが、色々と表現方法や手法を頭の中で言葉遊びを込めながら書いてきました。

初期は前後半に分かれる形で、前文を辿っていくように”エロス”と”タナトス”を巡る詩作を作り上げていく予定でした。

しかし僕の中で「なまえのないうた」を書いていた時期にいろいろとあり、そのところの心理変化やこれからの作風も含めて、より整理したものにしようと思ひ至りました。

ちなみに誤解のないように書いておくと同回と今回で自傷という言葉を使っていますが、これは”タナトス”の置き換えであり、その意味するところは死へと向かっていく力であり、その内容にはドラッグや反社会的ギャンブル行為、犯罪行為、暴力行為、そして自傷行為などを含んだものであり、際立って自傷行為だけをさしたものではありませんので、そのところは誤解のないようによろしくお願いします。

それではまた、次回作でお会いしましょう。

ツイッターなどで更新情報などはお伝えしていきますのでよろしかったらフォローくださいませ。

では、おつかれさまでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7010n/>

君らしく愛らしく世界は回る

2011年10月5日23時30分発行